其恕乎

河内利治（君平）
Toshiharu（Kunpei）Kawachi

『論語』衛霊公第十五に、孔子と子貢の問答がある。

子貢問曰、有一言而可以終身行之者、子曰、其恕乎、己所不欲、勿施於人。

子貢問うて曰わく、一言にして以って身を終るまで之れを行うべき者有り乎。

子曰わく、其れ恕乎。己の欲せざる所を、人に施すこと勿かれ。

子貢がおたずねしていった。「ひとことだけで一生行なっていけるということがありましょうか。」先生はいわれた、「まあ恕（思いやり）だね。自分の望まないことは人にもしむけないことだ。」

右現代語訳は、金谷治訳注『論語』岩波文庫（二一八頁）から引用した（以下同じ）。訓読は総ルビが振ってある、吉川幸次郎著『論語（下）』朝日選書・中国古典選（二〇九頁）から引用した（以下同じ）。それには現代語訳のかわりに次のような記述がある。

――「恕」とは思いやりである。句末の助字「乎」音コが二度見える。はじめの方は、簡単に疑問句の末尾にそなわるものであり、其レ恕カ乎、の方は、それは思いやりであろうか、と断定をひかえた語気である。恕の内容として、己所不欲、勿施於人。この八字は、顔淵第十二の仲弓に対する答えとしても、見える。

仲弓、仁を問う。子曰わく、門を出でては大賓を見るが如くし、民を使うには大祭に承うるが如くす。己の欲せざる所を、人に施すこと勿かれ。（後略）

仲弓が仁のことをおたずねした。先生はいわれた、「家の外で〔人にあうときに〕は大切な客にあうかのようにし、人民を使うときには大切な祭を行うかのようにし、自分の望まないことは人にしむけないようにする。」（後略）

『論語（下）』（七三頁）には、次のように記述される。

――仲弓すなわち冉雍が仁を問うている。（中略）孔子の答えは、敬虔と思いやりこそ、仁すなわち人間への愛情の、重要な要素であ

るというごとくに見える。

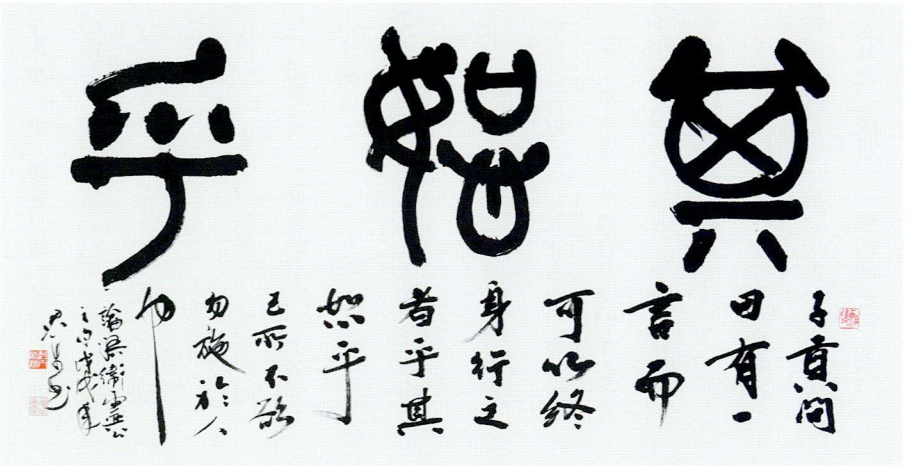
軽々な物言いを慎まなければならないが、衛霊公篇の子貢との問答、顔淵篇の仲弓との問答、その両者に登場する「己所不欲、勿施於人」という八字を解すると、人は敬虔（こまかい気配り）と恕（思いやり）こそが大切であると孔子がいっているようである。

冒頭の「子貢問曰」から「勿施於人」までの言葉を、産経新聞「大學ナビ」取材の場で揮毫した。記事は、産経新聞平成三十年五月十六日朝刊に掲載された。その詳細は、https://www.sankei.com/life/news/180516/lif1805160006-n1.htmlを参照されたい。

文房四宝を書道研究所に用意していただき、学長室の大きな円卓に毛氈を敷き詰めた。門脇廣文学長と書道部員が見守る中、カメラマンが私の動作に合わせてシャッターをきる。その音だけがまるで相の手を入れるように響く。席上揮毫と思って臨み、全紙サイズの画仙紙に何とかおさめた。横形式の構成は事前に考えていた。上半分は「其恕乎」三文字を篆書で、下半分は原文を行書で書くと決めていた。落款部分はその場で瞬時に判断して「論語衛霊公之句。戊戌年。君平書」とやや小さめに入れた。翌日、三顆の印を鈐した。

このように、観衆の面前で揮毫することを、席上揮毫といい、多くの人間が同時に書き合うことを席書会という。席上揮毫での作品づくりは、一発勝負の本試験だと思っている。気に入らない点画、字形があっても書き進めなければならない。こういう日のために、コツコツと古典の臨模を反復練習するのである。本来、再試験も追試験も無い「率意の書」、それが席上揮毫である。但し今回は、事前に書く言葉を決め、意味内容を理解し、その上で構成を考え、草稿（ペン書き）も作ったので、正しく言えば「用意の書」である。

急にその場で所望され書かねばならない時ほど辛いことはない。何故なら、観衆から、どのような言葉を書くか、どのように書くか、教養を含む全て瞬時に問われるからである。そのためにも普段の読書が大切である。要するに、日頃の古典臨書と万巻読書の成果としての、技法と教養が問われるのである。引いていえば、人間性が問われるのである。それゆえ、「書」ほど恐ろしいものはないと痛感している。



其恕乎

子貢問曰、有一言而可以終身行之者、恕乎、己所不欲、勿施於人也。

論語衛霊公之句。

戊戌年。君平書。